

## 論文

## 語構成特性分類に基づく Web 版中国語学習基本語彙集の作成

## 一字・語素・詞の関係に着目した語彙教育に向けて一

仇 晓芸  
(東北大学)

## 1. はじめに

一部に数字とアルファベットが使われる以外は全て漢字で表記される中国語の語彙の学習にあたっては、字（個々の漢字）、語素（一字以上の漢字から構成される意味の最小単位）、詞（単語）の3つの要素の間の関係を考慮する必要がある（本稿第2節）。これまでもそれぞれの要素を重視した語彙指導法が主張されてきているが、どのようなバランスの上で各要素を扱うべきか未だ検討の余地が大きい（本稿第3節）。本稿では、このような問題意識に立って筆者が行った分析の結果を報告する。併せて、これらの分析結果をもとに Web 上に公開した初級学習者を対象とした Web 版中国語学習基本語彙集の概要を報告し、ネットワーク上で利用可能なデジタル教材の具体的な利点について論じる。

語彙学習に関しては、実際にそれぞれの語彙が使われている文脈に触れながら語彙を身につけていく偶発的語彙学習 (incidental vocabulary learning) の重要性が指摘される一方で、単語帳などを用いた意図的語彙学習 (intentional vocabulary learning) の活用を一つの語彙学習方略として重視する立場がある (Nation 2001)。現実には、日本の大学の一般教育課程における初級中国語科目のように総学習時間数が限られている場合、後者に重点を置かざるを得ない。その際、語彙集の使用は大きな役割を果たす。実際、多くの中国語語彙集が出版されているが<sup>1)</sup>、Web 上に作成した語彙集は、(1) 文字と音声の関連付けが容易、(2) 検索が容易、(3) 作成者にとっては掲載と修正が容易、といった利点がある。一方、印刷媒体でもデジタル・ネットワーク媒体でも、語彙集の内容について考慮すべき事項は共通しており、収録語彙の選択、配列、説明の内容についての検討が必要なことに変わりない。

収録語彙の選定にあたっては、使用頻度と汎用性が基準となる。今回の語彙集作成では、『汉语水平词汇与汉字等级大纲』<sup>2)</sup>（国家汉语水平考试委员会办公室考试中心 2001、中国語語彙・漢字等級ガイドライン、以下『大綱』と呼ぶ）に収録されている全 8822 項目のうちで最も基本的とされる「甲級」に含まれる 1033 項目を採用した。冒頭で述べたとおり、中国語語彙教育において字・語素・詞の間の関係の理解に配慮した指導が必要であること

## 語構成特性分類に基づく Web 版中国語学習基本語彙集の作成

は広く認識されているが、語彙の提示の仕方や配列などについて具体的に示したものは見当たらない（本稿第4節）。そこで、改めて『大綱』「甲級」収録語彙に見られる語構成特性を分析し、その結果を Web 上の語彙表の配列と説明に反映させることを試みた。

## 2. 中国語の字・語素・詞

字すなわち中国語の漢字は、中国語に存在するいずれかの単音節に対応しており（表音節機能）、さらに全漢字のうち9割程度の漢字は語素として、何らかの意味を想起させたり、何らかの意味を表す機能（表語素機能）を合わせ持つ。他方、全漢字の1割程度は、表語素機能を持たず、他の漢字と一緒に使われてはじめて語素を形成する<sup>3)</sup>。

語素は1個以上の字（＝音節）から成り、詞を構成する意味単位である。1個の字からなる語素を単音節語素、2個の字からなる語素を双音節語素、3個以上の字からなる語素を多音節語素と呼ぶ。語素の多くは単音節語素であり、＜字＝語素＞の関係が成り立つ。また双音節語素は固有名詞や連綿詞が多く、多音節語素は外来語の音声転写表記にほぼ限られる。これらの場合には＜2個以上の字＝語素＞の関係が成り立つ。

一方、詞は、名詞、動詞、形容詞、副詞などのように文の構成成分となる単位である。中国語の詞には、2個の単音節語素から構成されるもの（したがって2字で表記）が多いが、1個の単音節語素からなるもの（1字で表記）や、3個以上の単音節語素からなるもの（3字以上で表記）も少なくない。このうち1個の単音節語素から構成される場合には＜字＝語素＝詞＞という関係が成り立つ。

語素と詞の関係に着目して考えると、単独で詞を構成することのできる語素を「成詞語素」あるいは「自由語素」、単独では詞を構成することができず、別の語素との組み合わせでしか詞を構成することのできない語素を「不成詞語素」、「不自由語素」あるいは「粘着語素」と呼ぶ。前者では＜語素＝詞＞の関係が、後者では＜2個以上の語素＝詞＞の関係が成り立っている。しかし、実際には＜字＝語素＞あるいは＜字＝語素＝詞＞の関係が成立する場合が多いために、三者間の関係、特に語素の存在が見えにくくなる嫌いがある（施正宇 2008）。

表1は以上に述べた字・語素・詞の間の関係を整理して示したものである。

表1 字・語素・詞の間の関係

関係	字の種類	語素の種類	例
1字 = 1語素 = 1詞	表語素文字	成詞語素（自由語素）	山、水
1字 = 1語素 ≠ 1詞	表語素文字	不成詞語素（不自由語素、粘着語素）	希/望、朋/友
1字 ≠ 1語素	非・表語素文字	（語素をなさない）	葡/萄、珈/琲

### 3. 中国語語彙教育における字・語素・詞の扱い

これらの要素を中国語語彙教育においてどう扱うべきかという点に関しては、3つの要素のうちの1つを優先させることを主張する立場がそれぞれに存在する（李彤 2005）。詞重視の立場（张朋朋 1992）、字重視の立場（徐通锵 1997、刘晓梅 2004、白乐桑・张朋朋 1997）、語素重視の立場（盛炎 1990、吕文华 1999、李如龙・杨吉春 2004、肖贤彬 2002）である。いずれの立場にも根拠があり、結局はこれらをバランスよく扱うべきだという結論に帰結するが、どのようなバランスをとるのが最善かという問いが残る。この問いに答えるためには、学習者が会える具体的な語彙において、これら3つの要素がどのような関係を持っているのかを明らかにしておく作業が欠かせない。

### 4. 学習基本語彙における字・語素・詞

王又民（1994）は現代漢語常用詞 3000 語を対象に分析を行い、「単音詞」→「語構成法」→「複合詞」（合成語）の順に教える「一体化教学法」を提唱した。张凯（1997）は『现代汉语常用词表』（中国国家语言文字工作委员会と国家教育委員会 1988）の 3500 字（常用字 2500、次常用字 1000）を分析し、3500 字を五つのレベルに分け、計 1056 個の漢字が語構成基本字であるとしている。しかし、何れも具体的な漢字を示していない。

『大綱』の甲級詞 1033 項目に関しては、吕文华（1999）が、合成語を構成する傾向が強い“车、店、人”のような成詞語素、“语、员”など出現頻度の高い不成詞語素、前綴（例：“老、第”）、後綴（例：“子、者”）などの定位語素を中心とした語素教育法を軸とした語彙教育を展開すべきだと述べている。しかし、分類した各語彙の提示は例示にとどまる。また、李开（2002）も『大綱』の甲級詞を分析し、語素と語構成の理論のもとで語彙教育を行うことの重要性を指摘しているが、具体的な字・語素・詞の分類結果は示していない。

本稿ではこれらの研究で指摘されていることの確認を含め、具体的なデータを提示しながら考察を進める。

## 5. 『大綱』甲級詞の分析

### 5. 1 『大綱』甲級詞の概要

次ページ表 2 は、『大綱』甲級詞収録項目の品詞別の出現回数について示したものである。

品詞の種類からみれば、名詞と動詞がとりわけ多く、形容詞がこれに続く。初期の語彙教育では、1 字あるいは 2 字からなる名詞、動詞、形容詞の習得がコアとなることが改めて確認できる。また、機能語にあたる虚詞は、内容語に比べて当然数は少ないが重要な存在であることが改めて見てとれる<sup>4)</sup>。なお、ここに提示した品詞別の割合は前出の李开（2002）に示されている数値とは若干異なる結果となった。

## 語構成特性分類に基づく Web 版中国語学習基本語彙集の作成

表2 『大綱』甲級詞収録項目品詞別出現回数

(括弧内は全項目数に対する割合の%)

品詞	単音詞	双音詞	三音節詞	計
(実詞)				
名詞	127	311	12	450 (40.3)
動詞	161	125	0	286 (25.6)
助動詞	7	6	0	13 (1.2)
形容詞	67	60	0	127 (11.4)
数詞	19	0	0	19 (1.7)
量詞	55	4	0	59 (5.3)
代詞	14	32	1	47 (4.2)
実詞小計	450	538	13	1001 (89.6)
(虚詞)				
副詞	25	26	2	53 (4.7)
前置詞	18	2	0	20 (1.8)
接続詞	4	13	0	17 (1.5)
助詞	16	0	0	16 (1.4)
感嘆詞	4	0	0	4 (0.4)
擬声語	0	1	0	1 (0.1)
接頭辞	3	0	0	3 (0.3)
接尾辞	2	0	0	2 (0.2)
虚詞小計	72	42	2	116 (10.4)
計	522 (46.7)	580 (51.9)	15 (1.3)	1117 (100.0)

出典) 品詞の分類は、基本的には国家汉语水平考试委员会办公室考试中心 (2001) に従い、旧版での誤りを修正した李・松岡 (1998) を参考にした。複数の表現が掲げられている項目についてはそれぞれの表現ごとに1回として、また、複数の品詞を持つ項目については品詞ごとに1回として集計した。合計の値が項目数を超えているのはそのためである。諸表現の項目は除外してある。

個々の語彙を構成する字数、すなわち音節数について見ると、単音詞、双音詞がほぼ半数ずつを占めている。ただし、その割合は品詞によって異なる。また多音詞は全て三音節詞で、数は限られる。

## 5. 2 『大綱』甲級詞の使用漢字

『大綱』甲級詞の使用漢字の異なり字数は800字で、『大綱』が学習基本漢字について定めている甲級漢字800字と3項目を除いて重なっている。具体的には、『大綱』甲級漢字に含まれ『大綱』甲級詞に使われていない3字は“辐、诗、桔”であり、『大綱』甲級詞使用

漢字で『大綱』甲級漢字に含まれない3字は“輔、特、尺”である。

### 5. 3 『大綱』甲級詞を構成する字と語素

#### 5. 3. 1 成詞語素と非成詞語素

『大綱』甲級詞に収録された詞を構成する使用漢字 800 字について、その一般的な使用における語構成特性を、ランカスター大学現代中国語コーパス (Lancaster Corpus of Mandarin Chinese、以下 LCMC) <sup>5)</sup> を用いて分析した。

800 字のうち、LCMC において 1 語素で 1 詞を構成する単純語としてタグ付けされた割合が総出現数の 80.0% 以上だった 31 項目を表 3 に示す。これらの字は成詞語素となり、1 字 = 1 語素 = 1 詞の関係を作る傾向が強い。甲級詞のうち単音詞は 522 項目を占めるが、これらの字 = 詞は其中でも単音詞に特化して用いられるものといえる。

表 3 単音詞を構成する傾向の強い字の例

棵、嗯 (以上 100%)、又、啊、呢、吗、的、吧、躺、她、您、也、把、啦、和、了、都、谁、被、让、呀、你、岁、喂、很、在、踢、爬、着、将、两 (80.7%)
---

また、LCMC において甲級詞使用漢字 800 字が 2 字以上で構成される詞の中で出現した回数が全出現回数の 97.0% 以上を占めた 88 字を表 4 に示す。これらの字は不成詞語素となる傾向が強いと言える。これらの字の多くは“愉快”、“基础”、“介绍”、など特定の語彙で使われる傾向が強く、したがって次項で扱う詞中の出現位置に関しても傾向は固定的である。なお多音節単純語である“咖啡”を構成する“咖”、“啡”などの場合については別の扱いが必要である。

表 4 多音詞の一部を構成する傾向の強い字の例

咖、啡、啤、愉、橘、础、绍、绩、苹、蕉、锻 (以上 100.0%)、什、济、孩、希、介、务、朋、践、坚、技、研、展、业、决、导、候、政、基、究、民、爸、参、验、然、睛、责、工、社、样、第、实、夫、理、员、育、术、产、历、欢、织、庭、族、己、消、习、题、农、昨、容、辛、篮、览、解、诉、概、汽、果、颜、子、况、努、复、公、认、增、计、电、校、世、现、阳、始、识、兴、艺、简 (97.0%)
---

字によって、1 字で詞を構成する傾向の強いもの、他の字との組み合わせで詞を構成する傾向の強いもの、その中でも特定の詞を構成する傾向の強いものがあることを明示的に示すことで、段階的・発展的な語彙学習を促すことが、これらの分類によって可能であると思われる。

### 5. 3. 2 合成語における語素の位置

LCMC で2字以上から成る語彙としてタグ付けされた項目のうち双音詞、三音節詞について、甲級詞使用漢字 800 字の語頭および語末での出現回数を調査した。

多音詞で出現する割合が 90%以上の字について語頭での出現回数が多音詞での出現総数に対して 90%以上だった 17 字を表 5 に示す。特定の詞で使われることが多く、その際、語頭に来る漢字が多い（例：啤酒、鍛煉、怎么、怎样、咖啡、尤其、努力）。これらのほか、日本語の場合と同様に、“昨”は、“昨夜、昨天、昨日、昨晩”のように日時を表す語素に前置され、“第”は数詞に前置される。

表 5 語頭に出現する傾向の強い字の例

啤、鍛、昨（以上 100%）、第、怎、咖、尤、努、旅、提、預、増、簡、參、改、研、危（90.1%）
---

多音詞で出現する割合が 90%以上の字について語末での出現回数が多音詞での出現総数に対して 90%以上だった 23 字を表 6 に示す。特定の詞で使われることが多く、その際、語末に来る漢字が多い（例：芭蕉、咳嗽、一些、眼睛、自己）。

表 6 語末に出現する傾向の強い字の例

蕉、嗽（以上 100%）、些、睛、己、績、候、況、踐、級、么、題、础、术、续、谊、示、晨、息、展、备、度、果（90.2%）
---

多音詞の中でそれぞれ語頭、語末に来る傾向の強いこれらの字をグループ化して提示することも、語彙学習の上で有用であると思われる。

## 6. 『大綱』甲級詞における語構成のパターン

### 6. 1 語構成パターンの分類

#### 6. 1. 1 双音詞

中国語の合成語構成のパターンについては研究者によって分類の仕方や呼び方が異なる。崔復愛 (1957) は 8 種類、王又民 (1994) は 7 種類、胡裕樹 (1995) は主な 5 種類、陸庆和 (2006) は 6 種類に分けている。これらを踏まえ、本稿では中国語の合成語の語構成について、I 群から III 群までの計 3 群に分類し、さらに I 群を 5 種類、II 群を 3 種類に分けた計 9 種類の分類を提案する。分類名が研究者によって様々である上に、その呼称のみからは、それぞれのカテゴリーの性格が直ちには分かりにくいことから、内容が明確に分かるような命名法を用いた。II 群は、＜語素＋語素＞という関係が成り立たないという点で I

群と質的に大きく異なる。さらにこれら各群の何れにも分類の困難なものは「III その他」に分類する。表7は以上をまとめたものである。

表7 双音詞合成語の語構成パターンの分類

崔复爱 (1957) 周荐 (1995)に引用	王又民 (1994)	胡裕树 (1995)	陆庆和 (2006)	本稿	例
联合式	并列式	联合式	联合式	I-1 「同類並列型」	父母 朋友
偏正式	定中式	附加式	偏正式	I-2 「修飾・被修飾型」	绿茶 雪白
动补式	动补式	补充式	补充式	I-3 「動詞・副詞型」	提高 改正
主谓式	主谓式	陈述式	主谓式	I-4 「主語・述語型」	人为 胆小
动宾式	动宾式	支配式	动宾式	I-5 「動詞・目的語型」	用心 知足 知己 监工
綴合式 (1) 前綴 (2) 後綴	附加式	—	綴加式	II-1 「音節付加型」 (1) 前綴 (2) 後綴	老师 桌子
重叠式 例：人人、	—	—	—	II-2 「音節重複型」	妈妈
簡略式 例：军属、 三反	状中式 例：迟到 广播	—	—	II-3 「簡略型」	四化 三反
—	—	—	—	III その他	

この分類法を用いて『大綱』甲級詞に含まれる双音詞合成語を分類した結果は、紙数の関係で省略するが、本研究で作成したウェブページに掲載したので参照いただきたい。

以下、『大綱』甲級詞からの例を示しながら、これらの分類の特徴を略述する。I-1「同類並列型」とI-2「修飾・被修飾型」が多数を占めたが、II「音節付加型」も相当数あった。

I-1「同類並列型」の特徴は、2つの語素の意味が同じカテゴリーに属し、反義語あるいは類義語の対をなす点にある。反義語の例として“大小、轻重、男女、东西、兄弟”、類義語の例として“意义、身体、丰富、语言、错误”が挙げられる。このパターンの語彙は、漢字ないしは単音詞を一定程度習得すれば理解は容易であると思われる。

I-2「修飾・被修飾型」の特徴は、＜形容詞＋名詞＞、＜動詞＋副詞＞のパターンを示す点にある。＜形容詞＋名詞＞のパターンの例として“车站、春天、动物、法语、化学”、＜動詞＋副詞＞のパターンの例として“高兴、预习、复习、再见、实现”などが挙げられる。これらも基本的な単音節語彙を習得しておけば、理解は容易であると思われる。

II「音節付加型」の特徴は意味は語彙中の一つの語素で十分に表されているのだが、双音詞化そのものを目的としたり、文法上の意味を与えることを目的として前綴、後綴を加えたり、同じ語素を繰り返している点にある。前綴を加えた例として“老师”、後綴を加えた例として“你们、他们”、語素の繰り返し（「音節重複型」）の例として“爸爸、妹妹、

## 語構成特性分類に基づく Web 版中国語学習基本語彙集の作成

哈哈”などが挙げられる。前綴、後綴の種類は限られているので、集中的に学習することで習得は容易であると考えられる。また「音節重複型」も習得は容易であろう。

### 6. 1. 2 多音詞

『大綱』甲級詞に含まれる多音詞は全て三音節詞である。これらの語構成パターンは大きく3種類に分けることができる。第1のパターンは所謂“儿”化問題に関連するもので、“一会儿、一块儿、一点儿、小孩儿、面条儿”がこれに該当する。最初の2字で構成されている単語の後ろに、“儿”が加わるもので、“儿”がなくても単語として使えることを説明する必要がある。第2は、＜双音詞＋単音詞＞のパターンで、“办公/室、图书/馆、文学/家、服务/员、留学/生、自行/车”が該当する。ここで“生”、“车”などの語素は属性を表し、語末に来る傾向がある。第3は疑問詞の“怎么样”で、双音詞“怎样”とはほぼ同じ意味で使われる。

## 7. 語構成特性に配慮した語彙集の作成

前節までで報告した分析結果をもとに、Web 版中国語学習基本語彙集の作成を行った<sup>6)</sup>。本稿執筆時点では、個々の語彙の発音音声を用意するには至っていないが、将来加える予定である。ウェブページ内にサイト内検索機能を用意したほか、ブラウザのページ内検索機能も利用可能であり、検索が容易である点は Web 版の利点である。

また、甲級詞に限定しているとは言え、総計 1033 項目の語彙について、本稿で検討した内容を細かく反映させ、盛り込んで行くには相当のスペースを要したが、ページ数の制約なしに掲載できた点も、Web 上に語彙集を構築することによって初めて可能だった。

このような特性を利用して、本稿で報告した甲級詞 1033 項目についての多角的な視点からの分析結果に基づき、音節数の違い、品詞の別、語構成パターンの違い、といった異なる基準による分類表を掲載することができた（次ページ、図 1、図 2 を参照）。

## 8. おわりに

多くは1字（1音節）か2字（2音節）からなる中国語の語彙は、一つの語彙が複数の品詞となって異なる意味を表すなど、さまざまな顔を持つ。その点で、同一の語彙群に対して、多様なアプローチを行って分類し、その結果をスペースの制限を気にせず提示できた点は、今回の Web 版学習基本語彙集作成の試みの一つの成果である。今後はテキストへの音声情報の付加、リンク機能による内容の関連づけを進め、内容を充実させていきたいと考えている。

筆者は、中国語教育に生かすことを目標に、中国語語彙に関する研究を行っている。今回、自分の研究テーマであるコーパスを用いた中国語語彙の語構成特性分析の結果を教材



の作成に生かす試みを行う中で、言語に関する分析と教材作成を並行して行うことの重要性を実感させられた。学習者の利用を想定して分析結果の提示を行うことは、分析の視点と結果の提示のしかたを繰り返し顧みることにつながる。特に Web 教材の場合、内容の変更が随時行えることから、言語分析と分析結果の教育的提示の間を行き来することが容易である。今後は、低頻度語彙についても同様の試みを展開したいと考えている。

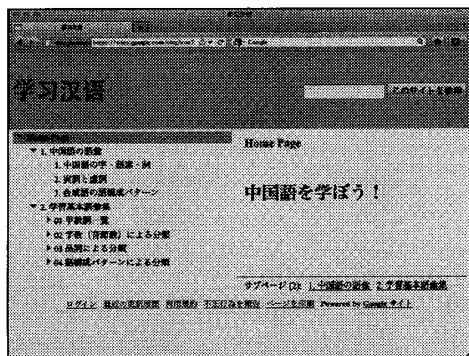


図1 サイトのホームページ

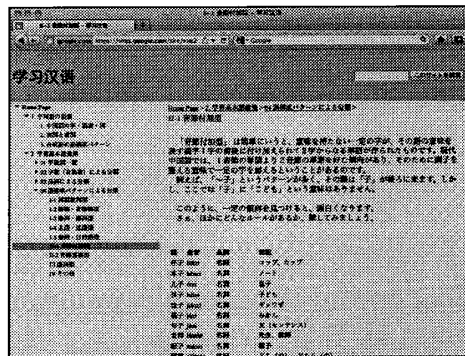


図2 サイト内のページ (例)

## 注

- 1) 例えば、『暮らしの中国語単語 7000』(2002)、『外来語(カタカナ)―中国語―英語単語集』(2004)、『仕事に使える中国語単語』(2005)
- 2) 『汉语水平词汇与汉字等级大纲』は、中国国家漢語水平考試委員會弁公室考試中心によって定められた中国語教育全般についての語彙および漢字のガイドラインである。第二言語としての中国語の検定試験である漢語水平考試の参考資料として知られている。語彙ガイドラインには甲級詞 1033 語、乙級詞 2018 語、丙級詞 2202 語、丁級詞 3569 語が、漢字ガイドラインには甲級字 800 字、乙級字 804 字、丙級字 590 字、丙級字付録 11 字、丁級字 670 字、丁級字付録 30 字が収録されている。
- 3) 表音節機能、表語素機能などの概念については DeFrancis (1984) を参照。非表語素漢字の割合について、尹斌庸 (1991) は 12%、苑春法・黄昌宁 (1998) は 7% としている。
- 4) 虚詞の定義と分類についてはさまざまな立場があるが、本稿では白晓红 赵卫 (2007)、李晓琪 (2005) に従った。
- 5) LCMC は、Tony McEnery と Xiao Zhonghua によって中国語研究を目的に作られ、公開されている均衡・品詞タグ付きコーパスである。全体ののべ語数 (token) は 1,001,826、異なり語数 (types) は 53,433、総字数は 1,477,487 である。概要は以下に紹介されている。 <http://www.lancs.ac.uk/fass/projects/corpus/LCMC/> (最終閲覧日: 2011 年 9 月 22 日)。またコーパス・データは以下でダウンロード可能である。 <http://ota.ox.ac.uk/headers/2474.xml> (最終閲覧日: 2011 年 9 月 22 日)
- 6) サイトの URL は以下のとおり。 <https://sites.google.com/site/xue2xi2han4yu3/>

## 参考文献

- 白晓红 赵卫 (2007) 《汉语虚词 15 讲》北京语言大学出版社
- 白乐桑 张朋朋 (1997) 《汉语语言文字启蒙》华语教学出版社
- 国家汉语水平考试委员会办公室考试中心 (制定) (2001) 《汉语水平词汇与汉字等级大纲》(修订本) 经济科学出版社
- 胡裕树 (主编) (1995) 《现代汉语》(重订本) 上海教育出版社
- 江新 赵果 黄慧英 柳燕梅 王又民 (2006) 外国学生汉语字词学习的影响—兼论《汉语水平大纲》字词的选择与分级《语言教学与研究》第 2 期 14-22 页
- 李如龙 杨吉春 (2004) 对外汉语教学应以词汇教学为中心《暨南大学华文学院学报》第 4 期 1-8 页
- 李彤 (2005) 近十年对外汉语词汇教学研究中的三大流派《语言文字应用》第 3 期 9-11 页
- 李开 (2002) 对外汉语教学中的词汇教学与设计《语言教学与研究》第 5 期 55-58 页
- 李晓琪 (2005) 《现代汉语虚词讲义》北京大学出版社
- 刘晓梅 (2004) “字”本位理论与对外汉语词汇教学《广东外语外贸大学学报》第 15 卷 第 4 期 5-8 页
- 陆华 李业 (2007) 对外汉语词汇教学的瓶颈与突破《当代教育论坛》第 9 期 96-98 页
- 陆庆和 (2006) 《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
- 吕文华 (1999) 建立语素教学的构想《对外汉语教学语法体系研究》北京语言文化大学出版社 307-314 页
- 盛炎 (1990) 《语言教学原理》重庆出版社
- 施正宇 (2008) 词·语素·汉字初探《世界汉语教学》第 2 期 109-118 页
- 王又民 (1994) 汉语常用词分析及词汇教学《世界汉语教学》第 2 期 58-62 页
- 肖贤彬 (2002) 对外汉语词汇教学中“语素法”的几个问题《汉语学习》第 6 期 68-73 页
- 徐通锵 (1997) 《语言论》东北师范大学出版社
- 张凯 (1997) 汉语构词基本字的统计分析《语言教学与研究》第 1 期 42-51 页
- 张朋朋 (1992) 词本位教学法和字本位教学法的比较《世界汉语教学》第 3 期 222-223 页
- 周荐 (1995) 《汉语词汇研究史纲》语文出版社
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆
- 
- 幸田圭史 (2004) 『外来語 (カタカナ) —中国語—英語単語集』国際語学社
- 佐藤正透 (2002) 『暮らしの中国語単語 7000』語研
- 鳥井克之 (2005) 『中国語教学文法概論』関西大学出版部
- 古川慧能公 (2005) 『仕事に使える中国語単語』明日香出版社

仇 晓芸

李玉敬 松岡榮志（監修）朝日中国文化学院（編）(1998)『中国語基本語 3000—HSK[漢語  
水平考試]大綱準拠』三省堂

DeFrancis, John (1984) *The Chinese language, fact and fantasy*. University of Hawaii Press

Nation, I. S. P. (2001) *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press